

### 循環型家庭菜園のすゝめ

SDGs—この単語を耳にする度、わたしは、「緑」を連想する。カラーとしての「ミドリ」、植物としての「ミドリ」をイメージするのである。なぜだろうか。

わたしの住んでいる豊島区は東京都の都心部に位置し、田畑を目にするのは限りなく少ない。田畑の風景には出会いたくとも出会えない。出会えないということは、食べ物を「消費」するのみの地域ということになる。持続可能な社会を作るためには「生産」と「消費」、そして開発を調和させた都市づくりが重要になるのではないかと考える。

わたしは、中学2年の夏、ある里山を訪れた。「里山」とは、田畑や人家、雑木林などが共に在る場所を指して呼ぶそうだ。水田を見れば、青々と茂る稲があり、背後の雑木林からは蝉の声が聞こえ、都会では感じられない心地よい「夏」を感じることができた。都会の騒々しさがまるで嘘であったかのように心と体を癒してくれた。里山の風景には四季折々の絵があり、音があり、変化に富んだ彩りを感じさせてくれるのである。季節感を失いつつある都会に、わたしは「ミドリ」と人間が共存できる「里山」の環境をつくるのが持続可能な地域社会になるものと考え、その取り組みの1つを提案したい。

豊島区の街に里山を作るのである。簡単なことではないだろう。だからこそまず、それを実現させる第一歩として、自宅のバルコニーにおいて小さな「里山」の形成に取り組むことにした。具体的に述べると、趣味で営んでいる家庭菜園を少しずつ持続可能な家庭菜園へと改善しているのである。食卓にあがる食材の一部を生産し、家庭で消費し、消費の過程でやむなく出てしまった生ごみをコンポストの活用によって分解し、堆肥として次の作物づくりに活かす。このように家庭内で「生産・消費・分解」の3つを循環させようと昨年の夏頃から始動したのである。SDGsという単語に出会う前、わたしの家庭菜園では育てたい野菜を生産し、消費するだけの一方通行だった。SDGsについて学び、自然と共存することの重要性を理解して以降、この循環型家庭菜園の確立に向けて努力している。もちろん、限られたスペースと設備の中で、家庭から出た全ての生ごみを堆肥作りにつなげることは簡単で

はない。ただ、可能な範囲で「生産・消費・分解」のサイクルを繋げ、生命の循環を生み出すこと。これはわたしができる取り組みの1つだ。

都心部に位置する豊島区においては地方で見たような大きな里山を作り出すことは難しいだろう。しかしながら、この街に住む各家庭が「消費」のみの生活の中に「生産」と「分解」を取り入れることができれば、里山づくりに向けて大きく前進するのではないか。そして、持続可能な菜園の輪を各家庭から学校、自治体へと広げ、校庭や公園の片隅で小さな里山を形成したときに「ミドリ」と共存する街、豊島区の実現が近づくものと考えている。

更に発展的に「開発」という部分で考えると、豊島区において「地産地消」を推進したい。「生産・消費・分解」のサイクルにおいて自分で作った野菜を頂く喜びは格別なのは自分が何よりも理解している。その喜びを豊島区全体で共有できればという願いもある。

家庭菜園—その持続可能性に視野を広げてみると、とらえ方が180度変わった。分解という要素を付け加えるだけで単なる植物栽培が循環型家庭菜園に近づくのである。小さな里山には多くの命がめぐり、地産地消を通して地域社会に笑顔を届けることができる。

SDGs、わたしはこの単語から「緑」を連想すると先に述べた。今は、「ミドリ」を構想したいとも思う。高層ビルの窓から街を見下ろしたときに眼下に広がる豊島区の景色が、「ミドリ」と共に在るように、始動したい。そして、その日を必ず実現させようと考えている。